

山形県保健師長会ニュースレター

令和3年10月27日 第23号 発行：山形県保健師長会

紅葉のきれいな季節を迎えました。10月9日土曜日Zoomで『全国保健師長会東北ブロック研修会』を開催しました。今年度は本県の当番であり、皆様方の御協力に感謝申し上げます。今回はその報告をさせていただきます。明日からまた元気に仕事ができるよう、ちょっとだけ手を休めて、御一読いただければ幸いです。(記:会長 伊藤京子)



同日、県の注意・警戒レベルがレベル3に引き下げることに伴う会議の前のご多忙の中、ご講演をいただきました！！

講演の中では、コロナ禍の中でも、自宅で育てた朝顔の成長の写真や夏の月山登山で撮影したニッコウキスゲ、野草園で自然に身を置く先生の写真も紹介され、忙殺されるような日常でも、心のリセットに心がけている先生の生き方にも学んだひとときでした。

「新型コロナ対応と危機管理」

講師 山形県健康福祉部 医療統括監 阿彦忠之氏



【講演のおもな内容】

1. 新型コロナウイルス感染症における保健所の奮闘

保健所のおもな業務

①相談対応と受診調整 ②感染者への対応（入院先の調整、自宅療養患者の健康観察などの療養支援）③積極的疫学調査 ④接触者対応（濃厚接触者の特定、PCR検査の誘導など） ⑤クラスター対策（発生施設の調査など）

課題と今後のあり方

①接触者対応やクラスター対策など進めながら相談対応、受診調整など業務の守備範囲も広く、業務負荷が過大し、保健師等の人員体制が逼迫した。

⇒そのことから危機管理対策で重要となる緊急時対応能力が脆弱だったことを受け、平時からの人員定数の確保が必要であり、今、保健所保健師の増員や保健所医師の確保につながっている。

2. 結核対策で培った技術・方法論の活用

積極的疫学調査には、結核対策で培った手法をコロナ対策にも応用したことは有効だった。また結核の治療戦略の基本である「人と人がつながって人を治す」という考え方をコロナ対策にも患者、感染者の治療・療養支援の場にも浸透させたい。

3. COVID-19パンデミックは特殊災害に相当

クラスターが発生した病院や介護保険施設等の支援にあたっては、災害時の危機管理の経験を活かし、各保健所に感染対策本部を設置する方法はクラスター対策に踏襲した。

また、受入調整本部の事務局職員や経験豊富なDMATメンバーを派遣し、経時活動記録と、業務の可視化に関する支援は外部からの保健師等の支援の受け入れなどでのチーム作りに役立ち、保健所の組織的な対応能力の回復につながった。

4. 保健師リーダーへの期待

①コロナのような新興感染症の健康危機管理にあたっては、保健師が関わる業務全体を所属や課を越えて見渡し、課題の把握とどこに支援し何を解決すれば組織としての対応能力が高まるかを考える姿勢を持つ。

②保健師の専門性を発揮できるよう、優先度を見極め、調整し、効率的な対応を提案できる能力をつける。

③平時から「業務の見える化（可視化）」を進めたらどうか。業務のあり方や質の向上策を検討するのに役立つだけでなく、健康危機発生時に外部から保健師等の支援を受け入れる際にも役立つものである。

(記:理事 佐藤 潮)

～ 令和3年度 全国保健師長会活動報告より ～ ◇全国保健師長会 副会長 前田 香氏

令和2年度全国保健師長会調査研究事業(独自事業)である「新型コロナウイルス感染症における活動調査」を実施した。その中で「感染症対応をしながら通常業務にも取り組まなければならなかった」との回答が多かった。コロナ禍の状況は災害時と類似しているが、災害時より長期に亘ることを認識して対応していく必要がある。また今回の感染症対策を担う公衆衛生活動が注目される中で保健所保健師のマンパワー不足が指摘され、その後の保健師増員につながっている。→その実態調査として、令和3年度調査研究事業を予定している。



～コロナ対応における保健師活動～
(各県支部長が、自分の所属での活動状況について発表)

〈青森県〉◇支部長 飯田貴子氏(野辺地町役場)
県知事の9月の宣言によりワクチン接種が進み、住民への疑問・要望に答え苦情への対応に当たってきた。最近健康づくりに関する業務は平時に戻ったが自死が増加に転じた。
コロナ後の対策は、社会と共に変化し色々整理されやり方が変わっていくのではないかと。

〈宮城県〉◇支部長 只野里子氏(塩釜保健所岩沼支所)
管内は県の1/4の人口を抱え支所も2市2町を管轄し平時もギリギリの人数。(6人)
患者への説明、自宅待機者の健康観察を担い、時に救急搬送のケースもあった。普段から顔の見える関係が築けていたことから市町村の応援を得られたが、その際業務の可視化の必要性を痛感した。

〈福島県〉◇支部長 三瓶ゆかり氏(県南保健福祉事務所)
所内を2班に分け、事務職にも患者移送、接触者の事前調査等を担ってもらい、何とか乗り切った。また、県庁の統括保健師が調整し、他県や他保健所への保健師の派遣も実施した。
第6波に向けて、地元医師会、市町村とさらなる連携を図ること、受援を想定し、考え方や様式の統一が必要と感じた。

〈岩手県〉◇支部長 菊池浩子氏(岩手県中央保健所)
県庁に支援室が設置され、OBの方が保健所に派遣され疫学調査に当たってくださり、所内でも協力を得ることができた。リモートは研修の他、患者の健康観察にも役立った。
感染者数が減少した今、業務の見直しを図っていくことが次世代につなげる役割ではないかと。

〈秋田県〉◇支部長 高橋 香苗氏(県健康福祉部)
コロナの相談業務はコールセンターで24時間対応しあちこちで患者が発生した時は応援派遣を県で調整した。また病院への入院、施設での発症時はDMATのような支援チームが健康教育に当たった。
市町村と情報共有する必要がある。

〈山形県〉◇支部長 伊藤 京子(置賜保健所)
これまで幼稚園、工事現場、高校、高齢者施設等でクラスターが発生し、関係者の協力により短期間で全員のPCR検査が実施できた。
在宅療養者の健康観察においては医師会からの協力もスムーズに得られ、普段からの連携ができていなければ緊急時も連携できない事を実感した。

(記:会計監事 佐藤 玲子)

令和3年度全国保健師長会東北ブロック研修会に参加して

このたび、保健師長会の一会員として研修会に参加する機会を得られたことに感謝いたします。

新型コロナ感染拡大の影響でオンラインによる研修会となりましたが、第5波が過ぎた丁度良いタイミングで、各県の様々な立場で活躍されている方々から生の声を聞かせていただき大変刺激を受けました。県の保健師は感染症対策・危機管理対策に、市町村保健師はワクチン接種対応にと日々追われる中で、公衆衛生看護活動は感染症対策を中心にまさに台風の目の中にある感覚で、時代の変り目に立っていることを実感している毎日です。保健師長会の歴史を紐解いた時、混乱期こそ正しい情報を伝えリーダーが団結していくという先輩方の熱い思いと、40年後の将来を描き保健師活動の重要性を引き継いで今があることに、今更ながら感動し今後への活力を得たところです。

阿彦先生からは、山形県におけるCOVID-19対策における保健所の奮闘、結核対策で培った技術・方法論、感染対策本部の保健所内設置の実際についてお聞きし、保健師リーダーへの期待とともに、市町村では予防接種業務の中でも、感染症の流行状況等について住民へのわかりやすく正しい情報を提供できるようにとエールをいただきました。印象的だったのは、過酷な業務の合間に、月山のニッコウキスゲやご自宅のアサガオなど自然に目を向けられていたことです。多忙な日々でも心に潤いを持てるよう心がけていきたいと思いました。

今回の研修会で、保健師の業務を可視化し、効果的な活動、業務の効率化、人員配置の最適化等にデータを活用していくことが課題であることを改めて認識し、ウィズコロナ、アフターコロナ時代、デジタル化加速化する中での公衆衛生看護活動を、40年後の後輩に伝えることができるように日々研鑽していきたいと、思いを新たにしたい一日でした。ありがとうございました。

(記:理事 菅藤 美記)

《編集後記》
みなさん研修会への参加ありがとうございました。来年度は直接会って語り合いたいです。(役員一同)